

日本住宅公団 田原団地建設予定地内  
田原城址・田原遺跡  
発掘調査概要・II

— 四條畷市大字下田原・上田原 —

1981・3

四條畷市教育委員会

日本住宅公団 田原団地建設予定地内  
**田原城址・田原遺跡**  
**発掘調査概要・Ⅱ**

— 四條畷市大字下田原・上田原 —

1981・3

四條畷市教育委員会

## は し が き

四條畷市田原地域にかかる日本住宅公団の住宅団地建設計画にもとづき、開発に先行する埋蔵文化財調査は、昨年度に引き続き昭和55年度も市教委に委託され、こゝにその調査を終了し概要を報告することになった。今回の調査は、団地計画地域の南東部にかかる田原城址の範囲確認調査と、団地計画地域北部の戎川右岸の現在住宅地に隣接する丘陵地の調査であった。

室町時代の終り頃、四国から出た三好長慶はその居城を飯盛山にもとめ、一時期その勢を近畿一円にふるったのであったが、田原城はこの飯盛城の支城として歴史上に出てくる城であった。安土城や大坂城の築城以前に構えられた城としてこの田原城は、自然の地形をたくみに利用し、本丸、二の丸、あるいはかくし井戸等城としての予想される構えをもつた小さな山城であった。「城の下」「門口」「矢の石」等城郭に関連ある地名が今に伝えられ、それと共に城主は田原対馬守であったと云われている。

今回の調査では、地形、遺物等からみて、今まで予想されていたものより広い範囲で城の構えがあったものと確認せられた。また戎川右岸丘陵では中世から近世にかけての遺物が検出され、この時期の状況が明らかとなった。

調査に当っては、日本住宅公団、大阪府教育委員会をはじめ多くの方々のご指導ご協力をいただき無事に調査を終了することができ、改めて関係各位に深甚なる謝意を表するものである。

四條畷市教育委員会

教育長 櫻井 敬夫

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が、昭和55年度に日本住宅公団田原団地建設工事に先立ち、日本住宅公団関西支社より委託を受けて実施した四條畷市大字上田原791番地他に所在する田原城址・田原遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和55年10月1日に着手し、昭和56年3月31日まで発掘調査を行ない昭和55年度調査事業を終了した。
3. 発掘調査は、教育委員会社会教育課技師・野島 稔を担当者とし、調査補助員として森本澄一、松田裕伸があたった。  
出土遺物の整理・実測などについては、野島 稔、森本澄一、松田裕伸、阪本富美子、川本三智子、永井蓉子、一色ルリ子、島田恵子、井上智子、山口文代、樋口博子、植田真紀、松岡俊江があたった。
4. 本書の執筆は、野島 稔が行なった。
5. 発掘調査の進行・報告書作成などについては、同志社大学・瀬川芳則、大東高校・山口 博、グアム大学・片岡 修、大阪府教育委員会・井藤 徹、堀江門也、財団法人枚方市文化財研究調査会・宇治田和生、三宅俊隆、桑原武志、歴史文化研究保存会の諸氏、諸機関から種々の御教示をうけた。明記して感謝の意を表したい。
6. 発掘調査の進行については、日本住宅公団関西支社、田原宅地開発事務所四條畷市田原開発促進協議会、下田原区長・中尾雅雄、上田原区長・寺井正夫の諸氏には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表したい。又、調査作業については、株式会社フジタ工業、青野組・奥野重機の全面的な協力を得た。

# 本文目次

## はしがき

## 例　　言

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と歴史的環境	2
III	田原城研究史	5
IV	調査概要報告	8
	田原城址	8
	田原遺跡第3次発掘調査	19
V	まとめ	29

## 挿入目次

- 第1図 田原遺跡周辺地形遺跡分布図
- 第2図 田原城址平面図
- 第3図 第3次調査位置図
- 第4図 田原城南濠調査地位置図
- 第5図 田原城北濠調査地位置図
- 第6図 田原城濠内トレンチ断面実測図
- 第7図 田原遺跡調査地位置図
- 第8図 田原遺跡第3次調査トレンチ断面実測図Ⅰ
- 第9図 田原遺跡第3次調査トレンチ断面実測図Ⅱ

## 図 版 目 次

- 図版1 遺跡周辺の航空写真  
図版2 田原城址遠景  
図版3 田原城址遺景  
図版4 田原城址及び古堤街道・矢の石  
図版5 田原城南濠内第2トレンチ・第3トレンチ  
図版6 田原城南濠内第3トレンチ  
図版7 田原城北濠近景  
図版8 田原城北濠内第4トレンチ  
図版9 田原城北濠内第5トレンチ  
図版10 田原城北濠内第6トレンチ  
図版11 田原城北濠内第7トレンチ  
図版12 田原城第8トレンチ  
図版13 田原遺跡調査地全景・第6トレンチ全景  
図版14 第6トレンチ  
図版15 第8トレンチ全景  
図版16 第9トレンチ全景・北壁断面  
図版17 第11～第18トレンチ調査地全景  
図版18 第12・第13トレンチ全景  
図版19 第13トレンチ南壁断面・炭化物出土状況  
図版20 遺物写真・土器I  
図版21 遺物写真・土器II  
図版22 遺物写真・土器III  
図版23 遺物写真・土器IV  
図版24 遺物写真・土器V・石器I  
図版25 遺物写真・土器VI  
図版26 遺物写真・土器VII

# 田原城址・田原遺跡発掘調査概要・II

## I 調査に至る経過

昭和50年度に大阪府教育委員会が田原団地建設予定地内の遺跡パトロールを実施され、又、昭和52年度に四條畷市教育委員会が日本住宅公団関西支社からの依頼により建設予定地内の遺跡パトロールをそれぞれ実施した。

その結果、国道163号線と市道阪口谷線の交差する西側の丘陵に花崗岩で築かれた横穴式石室1基を確認することができた。この丘陵は標高173mから3本に、東向きに派生する北端の丘陵中央部に位置している。未発掘のため出土遺物は不明であるが築造時期は6世紀後半頃と考えられる。もしこれが古墳とすれば今後この周辺の丘陵上に数多くの横穴式石室が検出される可能性がある。

次にこの古墳の東の眼下に流れる戎川と辰巳谷線の交差する所に角堂橋と呼ばれる橋の周辺に瓦器碗、土師質皿、布目平瓦が数多く表面採集することができた。この橋の名にも出ている角堂は中世の堂があるのでないかと思われる。この場所は現在水田になっているが約50~60m四方の水田から上記の上器片が採集することができた。

山の中腹には、花崗岩が露出している巨石群が2ヶ所に見ることができる。又、この巨石群の周辺には花崗岩の石垣が築かれている。この石垣は地元で近世に切り石の残石で石垣を築いたと云われている。

建設予定地の南端の字八ノ坪には田原城址が地元の協力により保存されている。

この田原城址については第Ⅱ章の田原城研究史について詳しく述べることにしたい。最後に建設予定地内全域に約50基以上の炭焼き窯を見ることができた。

大阪府教育委員会及び、四條畷市教育委員会が発見した土器散布地を日本住宅公団作成の地図上に印を行ない、この資料をもとに日本住宅公団・大阪府教育委員会・四條畷市教育委員会の三者によって協議を行なった。この結果、昭和53年度に第一次発掘調査をこの土器散布地を中心に遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

昭和54年度には第2次発掘調査として田原団地建設に係る戎川改修工事予定地内の調査を中心としたものであり、今回の昭和55年度第3次発掘調査は、団地計画地域の南東部にかかる田原城址の範囲確認調査と、団地計画地域北部の戎川右岸と既成集落に隣接する丘陵地の遺跡の確認及び遺構の保存状態を目的に四條畷市教育委員会が調査を実施した。

## II 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県の県境にある。田原は四方を山に囲まれた盆地として夏は四條畷市内より約1度～2度気温が低く住みよい場所である。

田原盆地の中央を北流する天野川が大阪府と奈良県の境になっている。

大阪府側は四條畷市大字上田原・大字下田原、奈良県側は生駒市大字北田原・大字南田原と呼ばれる地名である。

四條畷市大字上田原・下田原は、生駒山系東北部の山裾に位置し、北端には大阪から奈良への主要幹線道路の国道163号線と地区外南部の阪奈道路にはさまれた南北約2キロメートル、東西0.8キロメートル、開発面積約125ヘクタールの区域の開発である。

田原団地建設予定地と東側に北流する犬野川との間には、上田原及び下田原の既成集落があり、現在人口約1,400人の小規模な集落である。田原団地建設によって日本住宅公団の人口計画では3,900戸約15,000人の人口がこの団地に住む予定になっている。

本地域の地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。

田原地区に係る文化財としては昭和54年度(第2次発掘調査)に団地建設に係る戎川改修と市道辰巳谷線の路線変更地の調査において縄文時代に属する土器・石器ならびに石組の遺構が検出された。遺物の包含地は南北43m、東西13mの水田地2枚分の範囲にわたっており、表土下約1mの赤褐色でやや粘土まじりの砂質土層から近畿でも数少ない早期に属するもので北河内地方の早期縄文遺跡である神宮寺遺跡に次ぐ遺跡である。

出土した遺物は山形押型文、横円押型文、貝殻条痕文、過擦文の縄文式土器とともに石鎌、石ヒ、石錐、大型搔器、搔器、剝片石器、小型尖頭器、ハンマーストーンの石器が伴出している。又、市道辰巳谷線と戎川との交叉する角堂橋の西120mの生駒山系東傾斜面山裾の標高T.P.144.0mの水田地の全面発掘において、東西2.25m、南北2.45m、深さ40cmの土壤状遺構が検出し、遺構内堆積土層の褐色砂質土から土師質小皿、羽釜が出土した。土器形成からみて、また瓦器楕が共伴しないことから15世紀前半の遺構である。土壤状遺構の南において耕土下3.64mの深さの落ち込み状遺構が検出した。堆積土層は15層に細分され各層内からまとまった土器類が出土している。最下層から出土した須恵器口縁部や羽釜からみて12世紀中頃～終り頃とし、堆積土層上面からの瓦器楕、羽釜の出土から13世紀に落ち込み状遺構が完全に堆積したと思われる。

又、周辺では田原住吉神社境内の石槽があげられる。この石槽は花崗岩の巨石を加工した長さ約2m・幅約1m・高さ約0.7mのもので四日市街道工事中、犬野川畔から出土しこの地に運ばれたものであり、この石槽と同型のものが大阪四天王寺に現存している。住

吉神社境内石槽は昭和48年3月30日に大阪府文化財考古資料第7号として指定されている。又、同境内西側に十三仏がある。十三仏とは死んだ人の初七日から三十三回忌までの十三回の供養する仏像を一枚の板石に刻んだもので、鎌倉末期から十三仏が始まるといわれている。この十三仏は永禄8年（1565）のもので田原地区には照浦野田墓地内十三仏とあわせて2基が現存する。四條畷市内には中野正法寺・中野共同墓地・南野弥勒寺等合わせて



第1図 田原遺跡周辺地形遺跡分布図

- |                    |                           |          |
|--------------------|---------------------------|----------|
| 1. 照浦野田墓地(両墓制)・十三仏 | 5. 住吉神社境内石槽・十三仏           | 9. 巨石群   |
| 2. 正伝寺薬師如来         | 6. 月泉寺墓地五輪塔               | 10. 石垣造構 |
| 3. 森福寺跡            | 7. 田原城址                   | 11. 石組造構 |
| 4. 森山墓地(両墓制)       | 8. 田原遺跡<br>(绳文早期・古墳・鎌倉時代) |          |

7基が知られている。

次に上田原正伝寺別棟堂宇に高さ2mの薬師如来が安置されている。この仏像の胸のふくらみ、全体感、衣紋の滑らかさから見て鎌倉時代初期のものとみている。

この薬師如来は、もと「森福寺と号する上田原所在の真言宗寺院境内」にあったことが、天保15年(1844)明細帳に見られ、天文2年(1534)付の「神道移事書」の古文書からみて戦国期の寺院であった森福寺の薬師如来であったことが明らかである。現在は森福寺は廃寺となっている。又、正伝寺には両墓制がある。死者を葬った場所に墓碑を建て、そこを永久に祭りの場とするのを単墓制と呼ぶのに対し、比較的短期間祭りをしただけで近寄ることもせず、祭りをするための墓地を別の離れた場所に設けるのを向墓制と呼んでいる。一般に知られている墓地は単墓制である。

両墓制を残す所は全国で約70ヶ所報告されている。大阪では、富田林市、豊能郡出尻、枚方市津田の3ヶ所が数えられているのに対し、当市田原地区には、下田原5ヶ所、上田原に4ヶ所の墓地があって、月泉寺の丘輪塔、那塔墓地以外はすべて両墓制である。

次に田原城は上田原八の坪に所在する標高178.6mの生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに利用したもので、現在はこの城に関する文献資料はほとんど見当らないが、城郭に関連する地名が残されている。その地名と大小字名で「城の下」「門口」「土居の内」「鉢場」「矢の石」が地元で呼ばれている。

また頂上部の本丸跡にあるところに現在住吉大神を分祀している館がある。本丸跡は南北約26m、東西約7mの削平地で本丸跡から田原盆地を一望のもとに見おろすことができる。又、北は眼下に古堤街道で、周囲は谷と川でめぐらし平地との比高差は約30m高くなっている。本丸跡の南側に「切り堀り」があり「井戸ケ谷」へと続く「通し井戸」と呼ばれる井戸があり、非常用の水利と考えられる。「切り堀り」より西側の畠地「二の丸」としての性格をもち、当時の居館のあったところと推定されている。又、西南隅に突出した丘陵が「西砦」と考えられる。

田原城は田原対馬守を城主としたもので戦国時代の終り頃に近畿の霸となえた三好長慶の麾下にあった飯盛城の支城としての機能をはたし、やがて織田信長の統一によって消滅していったものと思われる。

### III 田原城研究史

四條畷市田原地区について記された公刊文書は、平安末期の保延5年（1139）、久安元年（1146）の小松寺縁起奉加帳に「田原西郷・田原東郷」と記されるのが最初である。

田原郷は大和国と河内國に両分されていたかの如くに考えられる。江戸期の河内志には、上田原・下田原を河内國の項に説明し、南田原・北田原については「俱に今は和州添下郡に属す」と記して、昔時は南・北田原も含め河内に属したかのような書き方をしている。併し、当田原が國・郡制の大化改新期より河内・大和の何れに所属したかの史料は全く欠けしており何れとも断定し難い。

又、元禄2年2月11日に大野川沿いに、交野・岩舟より田原に旅して著名な記行文を残した儒者貝原益軒は、60才の南遊紀行の中に、「岩舟より入て、おくの谷中七八町東に行ば、谷の内頗広し。其中に天川ながる。其里を田原と云。川の東を東田原と云、大和國也。川の西を西田原と云、河内國也。一澗の中にて兩國にわかれ、川を境とし名を同くす。此谷水南より北にながれ、又西に転じて、岩舟に出、ひき、所に流れ、天川となる。凡田原と云所、此外に多し。宇治の南にも、奈良の東にもあり、皆山間の幽谷の中なる里なり。此田原も其入口は岩舟のせばき山瀬を過て、其おくは頗ひろき谷也。恰陶源明が桃花源記にかけるがごとし。是より大和歌姫の方に近し。」と記行されている。

郷土史家平尾兵吉氏が昭和6年に「北河内郡史蹟史話」を出版された。その中の田原城址の項に以下の通り記述されている。

田原村大字上田原字八ノ坪にある。附近よりの高さ約50mの丘陵上にあって、西は生駒清瀧の山に続き、東方田原盆地に望んで、南北は自然の河谷を控え頗る景勝の地形である。南側の山腹とか山上には階段状に平地が断続して居る、多分往時城廓の建物のあった址と思われるが、今は畠とか宅地とかになってしまって、当年の雄闊も壯觀も見る由もない。頂上には今小さな住吉の神祠が建てられてある、現今城の上、城の下、門口、土居の内、的場、矢の石などの古い地名が名所に残されている。

口碑の伝える所によると、往昔此地の名族に田原対馬守というのがあった。城砦をこゝに構え八の坪を根拠に南北田原を領して居た。今日田原村月泉寺と称する禪宗尼寺に保管する過去帳には、延元丙子の記年ある義俊院殿節山良忠居士以下享暦天文に至る拾数名の法名がのせられてある、此月泉寺は元米水本村寳屋にあった月泉寺を移し、千光寺の名を廃したもので、もとは真言宗で千光寺と称し、城主たりし義俊院殿の開基で且其菩提寺であったといつて居る、足利氏末期の享暦天文の頃には三好氏が飯盛を根拠として、城を近畿にふるった頃で、田原氏は三好に属し、飯盛背面の防備に当たったと見られる。但し築造は此以前のものか或は三好當時に捕獲したか新に築いたか、総て分明でないのは遺憾至

極である。

尚、前記延元丙子三月五日の義徳院殿節山良忠居士であるが、延元丙子は延元元年で五月廿五日は恰も大輔公が漆川で戦死の日、義徳、節山、良忠の文字などについて考へても、勤王烈士の英靈を吊したものであるまいか、最近甲可村逢坂から出た延元元年の文字がある五輪塔婆と併せて考慮すべきものである。

#### 田原城に残る城郭地名

標高 175m、南北 90m、東西 100m の範囲に広がる田原城は、東に田原盆地を一望のもとに見おろし、北は眼下に走る古堤街道をおさえ、周囲を約 3m 幅の山水河流が囲繞して自然の濠を構成する。田原城自体が生駒の第一の山脈の西側に突出した部分でたくみに地形を利用した中世の城である。

残念ながら現在は、この城に関する文献史料はほとんど見当らないが、「城下、門口、井戸谷、矢の石、土居の内、的場」等の城郭に関連する地名が残され、近くの古老は佐水の「古城」、そして聚落を垣内と呼び「出垣内・入垣内」今なお使用する人がいる。

土居の内は、八の坪の別称「土居の内」とは中世居住の聚落の周囲を防禦のためにめぐらす土塁をいい、土家の屋敷、惣内と同じであってこの田原城は周囲を谷と川でめぐらしたものである。

一の門は田原盆地に望む東側にあり、すなわち東を正面とする田原城であった。一の門から小道を曲折しながら二の門を通り、なおも約 40m 程すすむと本丸を頭上にして二分している。この二分する場所が地元の古老は三の門と言われている。本丸と二の丸とは同一丘陵であったが、この築城の際に切り掘りを行ない本丸と二の丸とを区画されたものである。本丸は 26m × 7m の削平地に開けている。

本丸の西側に位置する二の丸の規模は東 11m × 24m、西 22m × 18m である。本丸の東側下に 37m × 7m の削平地があり、郭を築かれ防備を固めている。

切り掘りの西側には隠井戸と呼ばれる掘り井戸が二個並び、10m 程離れて山水貯水池が存在する。

砦については、山口博氏が四條畠市史第 1 卷において「西砦」と呼ばれている所は、四隅が深い絶壁に廻らされ、天然の要塞をなしており、又、裏山砦は前面が 2m 余の急崖にのぞみ、20m × 10m の郭を形づくって巌山づたいの防禦陣地を構成したと考えられている。今回の田原城の範囲確認調査において、西砦と西側に突出する丘陵との間の深い水田地において濠を確認することが出来た。又、北側の尾根においての調査でも濠の一部を確認し、この濠を結ぶ範囲が田原城の城郭である。

#### 田原城主・田原対馬守

田原城主が誰であるのか、又、田原城をめぐる合戦が行なわれたかについては、明らか

ではないが、史料的にみて、城主田原対馬守の菩提寺の月泉寺の位牌の中に延元丙子(1336)三月五日、義俊院殿山良忠居士。延文丙申四年(1359)十二月十日藤寿院雄山良意居士等が残存する。月泉寺墓地に三基の五輪塔と卵塔が立ち並び、三基の五輪塔の台石は五輪塔の基部たる地輪を敷き詰めたものであり、この墓地内には五輪塔が100基以上が林立したものであろう。

領主は、当初南朝に属し、のち北朝に転じ戦国期には畿内に君臨した三好長慶の家臣として、飯盛城の出城の役目を担ったと考えられる。

三好長慶が飯盛城に提升了のが永祿三年(1560)十一月十三日、三好の家臣となって大和をも睨んだ田原対馬守は、織田信長の畿内制覇の中、飯盛城の陥落・廃城と共に姿を消したのだろう。

## IV 調査概要報告

### 田原城址

田原城址は第Ⅰ章でくわしく述べたように、生駒の第1の山脈の西側に突出した部分をたくみに地形を利用した中世の城である。

田原城は地元の協力により、本丸・二の丸・裏山郭・西堀が完全に保存されていたが、今回田原城の西側一帯において日本住宅公団田原団地建設予定内にかかるため田原城の遺構有無の確認、遺構の保存状態を含めた範囲確認調査を人力において実施した。

今回の調査地は、山口 博氏が四條畷市史第1巻の田原城の構造図に示されている西堀(15m×12m)の西側の谷間の水田第1地区に3本のトレンチを設定し、また北側の古堤街道側の谷間の水田(第2地区)に4本のトレンチと田原城構造図の裏山郭の北側に1本のトレンチを設定した。

第1地区的水田は、5枚の棚田式の水田地であり、水田地の標高は、T.P 161.0 mを計り、西堀との比高差は10m強である。

第1トレンチは、5枚の棚田式の水田地の最も低い所に位置する、大字上田原919番地に幅1.5 m、長さ12 mの東西方向にトレンチを設定した。

層序は、第I層・耕土、第II層・床土、第III層は厚さ約25cmの茶褐色砂層、第IV層は厚さ約50cmの青灰色粘土層が堆積し、第V層は厚さ約20cmの青灰色砂層、第VI層は厚さ約40～50cmの暗褐色粘土層、第VII層は厚さ約40～50cm暗褐色砂層、第VIII層は厚さ約40cmの黒褐色粘土層が堆積し地山となる。地山は西から東にかけてゆるやかに傾斜している。

第I層内から陶磁器、土師質小皿、瓦質土器がそれぞれ出土している。

第2トレンチは棚田式の下から4枚目畑地の大字上田原921番地に幅1.2 m、長さ9 mの南北方向にトレンチを設定した。水田面の標高は、T.P 160.50 m、層序は第I層厚さ約40～60cmの黒褐色砂層、第II層厚さ約30cmの青灰色砂層、第III層厚さ約30cmの青灰色砂層(小砾混り)第IV層厚さ約10cmの青灰色粘土、第V層厚さ約45cmの青灰色砂層が堆積し地山となる。次に各層序からの出土遺物としては、第III層内から陶器、練鉢、土師小皿、瓦、羽釜、第IV層から磁器、土師小皿、須恵器がそれぞれ出土している。

第3トレンチは、第2トレンチの南側の水田地に幅3 m、長さ12 mの南北方向にトレンチを設定した。水田面の標高は、T.P 159.0 m、層序は第I層厚さ約18cmの黒褐色粘土層、第II層厚さ約30cmの褐色砂質土層、第III層厚さ約30cmの青灰色砂層、第IV層厚さ約20～40cmの青灰色粘土層、第V層厚さ約70cmの青灰色砂層、第VI層厚さ約50～70cmの黒褐色粘土層が堆積し地山となる。

各層序からの出土遺物としては、第III層内から土師質小皿、土師質大皿、陶器、羽釜、

おろし皿、くらわんか茶碗、第Ⅳ層内から土師質小皿が出土している。

## 第2地区

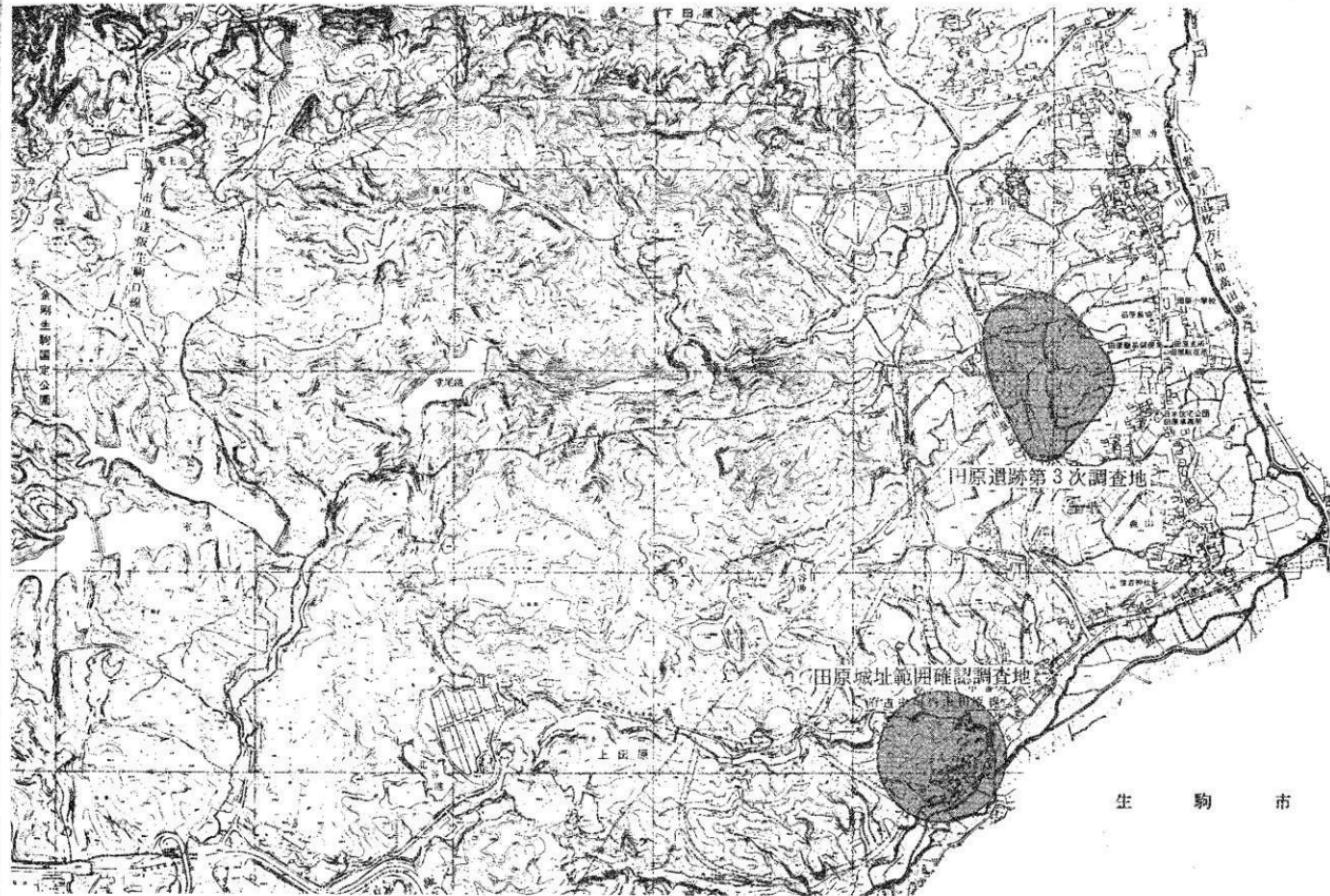
第4トレンチは、南北方向にのびる谷地形があり、その西側に位置する、標高T.P169mの山林に幅4m、長さ15mの東西方向にトレンチを設定した。

トレンチ設定場所が尾根の斜面であったため層序は、第1層厚さ20cmの表土、第Ⅱ層厚さ約15~20cmの黄褐色砂質土が堆積するだけで地山となる。トレンチ内からの出土遺物を見い出すことはできなかった。

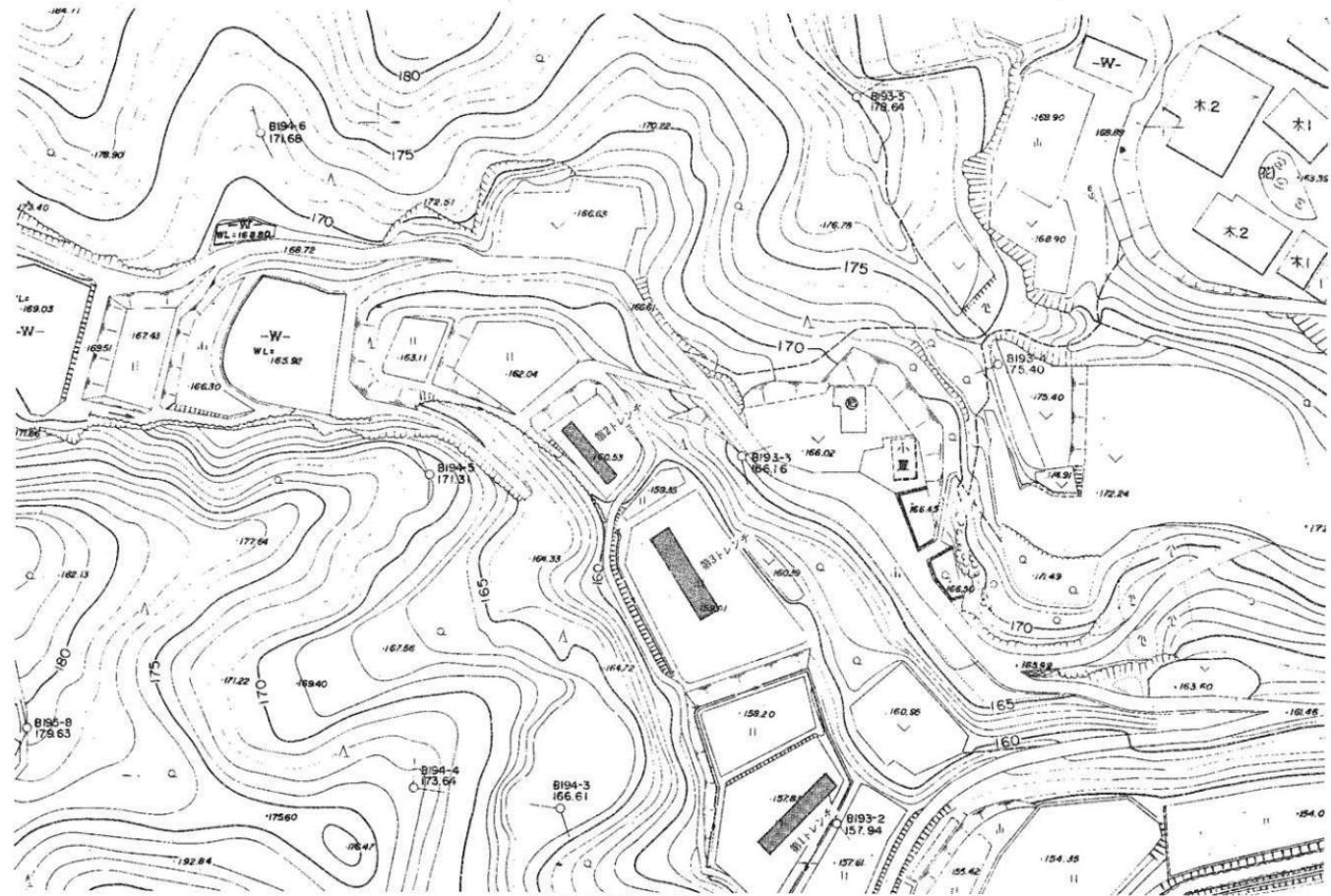
第5トレンチは、第4トレンチ設定の尾根と田原城址構造図に示す裏山郭との間にある



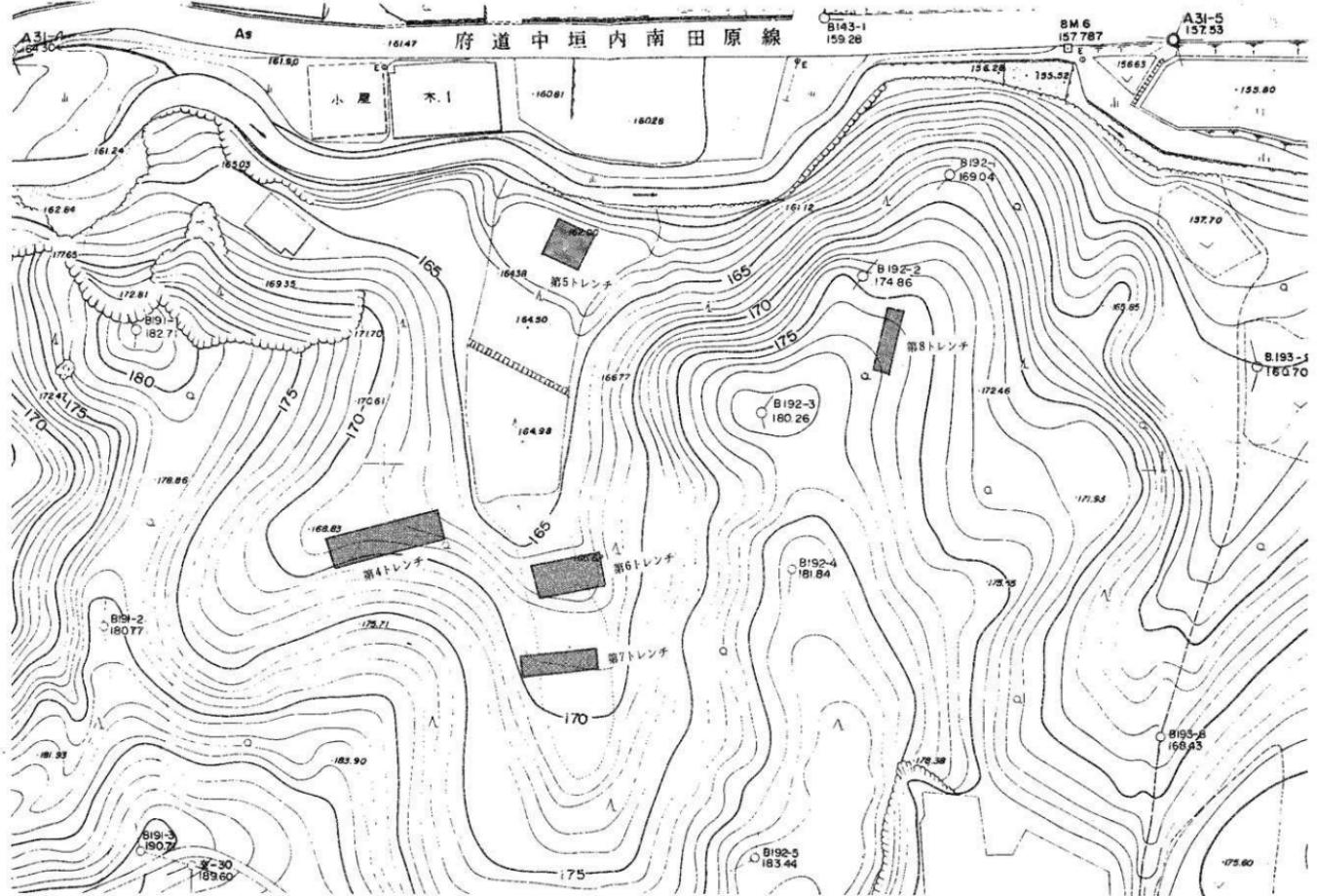
第2図 田原城址平面図



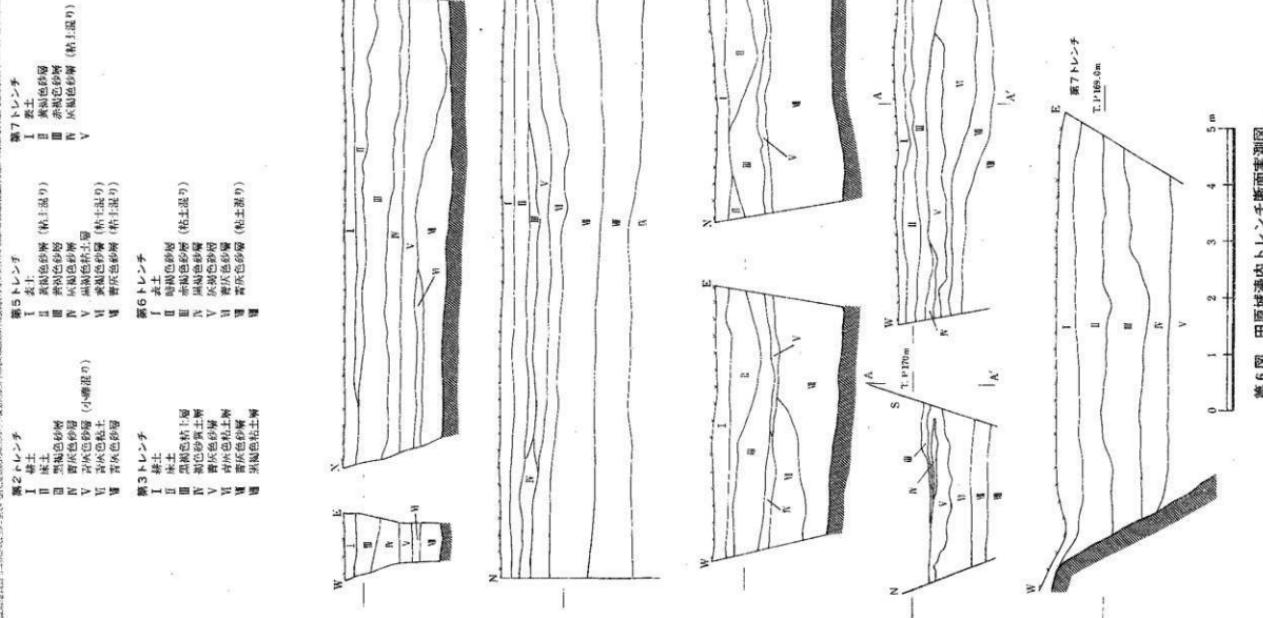
第3図 第3次調査位置図



第4図 田原城南濠調査地位置図



第5図 田原城北濠調査地位図



谷地形最下段の上田原791番地に所在する旧水田地に幅5m、長さ5mのトレンチを設定した。旧水田面の標高はT.P 162.0m、層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層厚さ約10~60cmの黄褐色砂層（粘土混り）で、第Ⅲ層厚さ約20~50cmの黄褐色砂層、第Ⅳ層厚さ約15cmの灰褐色砂層、第Ⅴ層厚さ約15~20cmの黒褐色粘土、第Ⅵ層厚さ約60cmの黄褐色砂層（粘土混り）第Ⅶ層厚さ約130cmの青灰色砂層（粘土混り）がそれぞれ堆積し地山となる。

東側断面第Ⅱ層内から、川原石を敷きつめた石敷造構が検出し、中から土師質小皿、陶器、瓦質土器が出土している。第Ⅳ層内から銅製品1点、第Ⅴ層内から元豊通宝1点、瓦器碗、第Ⅵ層内から羽釜、瓦、須恵器环身、第Ⅶ層内から土師質小皿が出土している。

元豊通宝は（北宋）1078~1085年に鋳造されたものであり、瓦器碗は、口縁部内面に1本の沈線をめぐり、高台は退化してわずかに残存する貼り付け高台を呈する。内面には、粗くてうすい螺旋形の暗文がめぐるものや、最下層出土の土師質小皿は体部上半へのヨコナデは弱く、ナデ自体は口縁内外面に重点が置かれ、底部の突起は発達し、ヘソ皿として定型化しているものである。出土した遺物からみて、13世紀後半から、14世紀中葉に比定される。

第6トレンチは、第4トレンチのすぐ東側の現杉林地に幅4m、長さ8mの東西方向にトレンチを設定した。層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層約20cmの暗褐色砂層、第Ⅲ層約10~60cmの赤褐色砂層（粘土混り）、第Ⅳ層約20cmの黒褐色砂層、第Ⅴ層約30cmの灰褐色砂層、第Ⅵ層約60cmの青灰色砂層、第Ⅶ層約30cmの青灰色砂層（粘土混り）が堆積し、第Ⅷ層下については、トレンチ内断面が崩れトレンチ調査が不可能となつたため、径25cmのボーリング調査に切り替えた結果、地表下約3.5mで地山を確認することができた。すなわち、北側断面実測で示したように田原城址（東側）斜面の地山面の一部を検出することができた。この地山面が田原城址の西側にかかる濠跡の一部のものであり、この濠跡を含むものが田原城址の範囲であることが明確になった。

次に各層序からの出土遺物としては、第Ⅱ層内から土師質小皿、瓦質土器が出土している。

第7トレンチは、第6トレンチより一枚上段の杉林地に幅2m、長さ8.5mの東西方向にトレンチを設定した。トレンチの設定は第6トレンチにおいて田原城址東側斜面濠を確認するために設定したもので表上面は標高T.P 170.0mで、層序は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層約50cmの黄褐色砂層、第Ⅲ層約60~70cmの赤褐色砂層、第Ⅳ層約40~50cmの灰褐色砂層（粘土混り）が堆積している。第Ⅴ層内から磁器、土師質小皿が出土している。

第6トレンチ同様表上下約2mまでの調査で断面が崩れ調査不可能となった。しかし、このトレンチにおいては北側にのびる尾根の東側斜面地山面を一部確認することができた。第6トレンチと第7トレンチにおいて、標高167~169mの等高線上においては田原城址濠

幅は約12~15mと考えられる。すなわちこの濠底部と裏山郭との比高差は18~20mおよび幅も約30~40mという急崖にのぞむものであった。すなわち裏山づたいの防禦陣地を構成したもので周囲を深い絶壁に囲はれて、天然の要塞をなしている。

第8トレンチは裏山郭の北側にのびる尾根の先端斜面に幅2m、長さ8.5mの南北方向にトレンチを設定した。この尾根の先端部の標高180.26mのフラット面にトレンチを設定することが出来なかったもので、尾根先端斜面に、第8トレンチとして設定したものである。層序は第I層表土下すぐに地山になっており、流出土及び堆積土は全く検出されていない。

#### 田原遺跡第3次発掘調査

第3次発掘調査は、市道辰巳谷線の東側丘陵一帯と、東側に派生する丘陵と丘陵との谷間に合わせて、25ヶ所のトレンチを設定した。以下各トレンチの層序を述べることにしたい。

第1トレンチは、市道辰巳谷線に近い標高154.0mに幅2.7m、長さ24mの南北方向にトレンチを設定した。層序は第I層表土、第II層底土、第III層厚さ約30cmの茶褐色砂層、第IV層は厚さ約25~40cmの白褐色砂層、第V層は厚さ約100cmの黄褐色砂層が堆積している。第IV層及び第V層内に白灰色粘土層がブロック状に入り込んでおり、この白灰色粘土層は後に述べる丘陵上における地山層である。

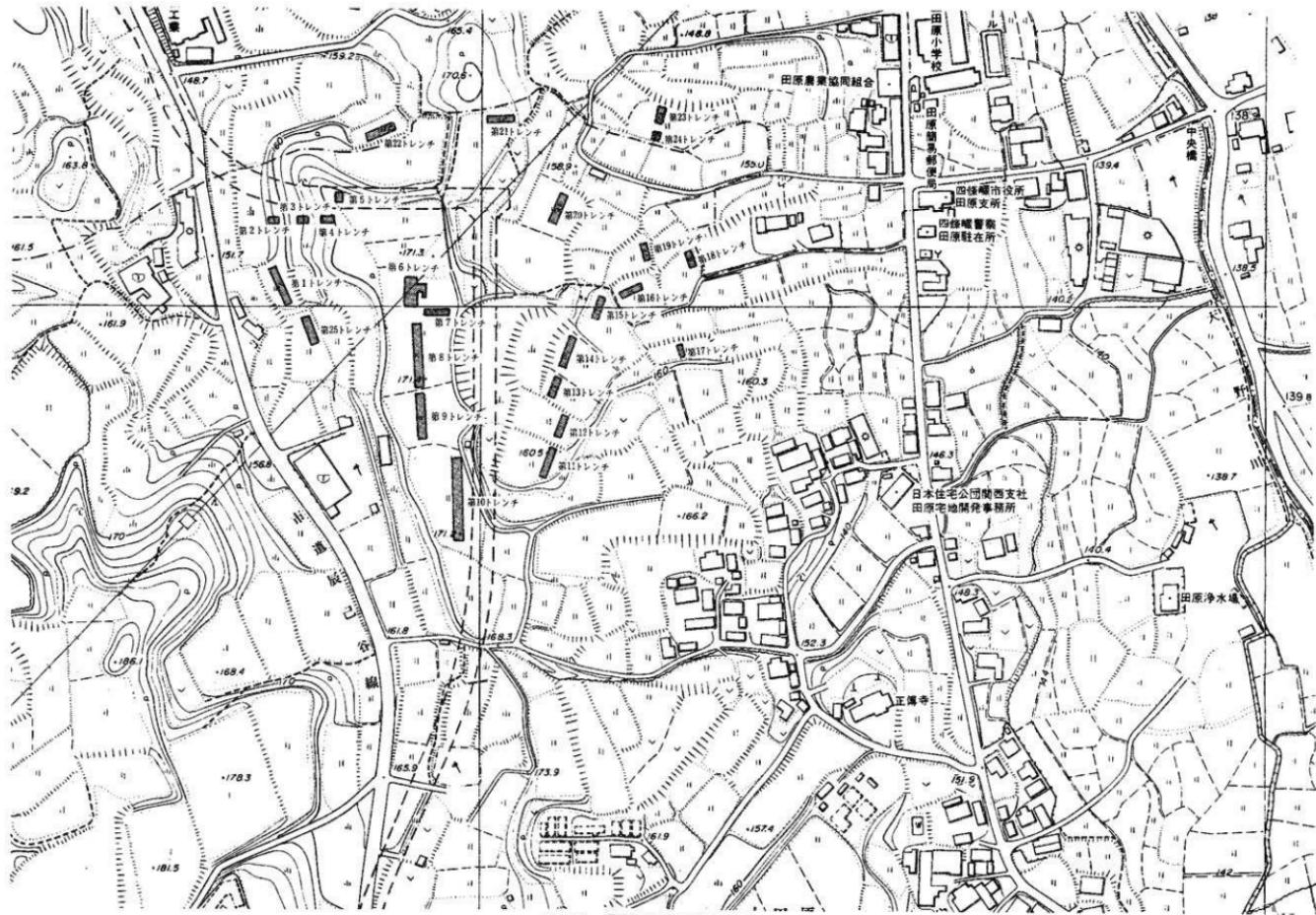
第2~第5トレンチは、第1トレンチの北東近くに位置する松林内に幅0.8m×長さ1.0mのトレンチを設定した。第2トレンチ~第4トレンチは丘陵先端傾斜面であったため、第I層表土、第II層黄褐色砂層が堆積し地山となる。第5トレンチの層序は、第II層厚さ約20cmの黄褐色砂層、第III層厚さ約10~20cmの白褐色砂層、第IV層厚さ約20cmの黄褐色砂層(疊混り)、第V層厚さ約15cmの白褐色砂層(疊混り)がそれぞれ堆積し地山となる。

第6トレンチは丘陵上にある関西電力北出原電源開発変電所への送電鉄塔の南側の130-1番地に幅6m、長さ16mの南北方向のトレンチを設定したところ、トレンチ東側端において落ち込みが検出したためトレンチ東側に幅約2m、長さ5mのL字形にトレンチを拡大して調査を実施した。

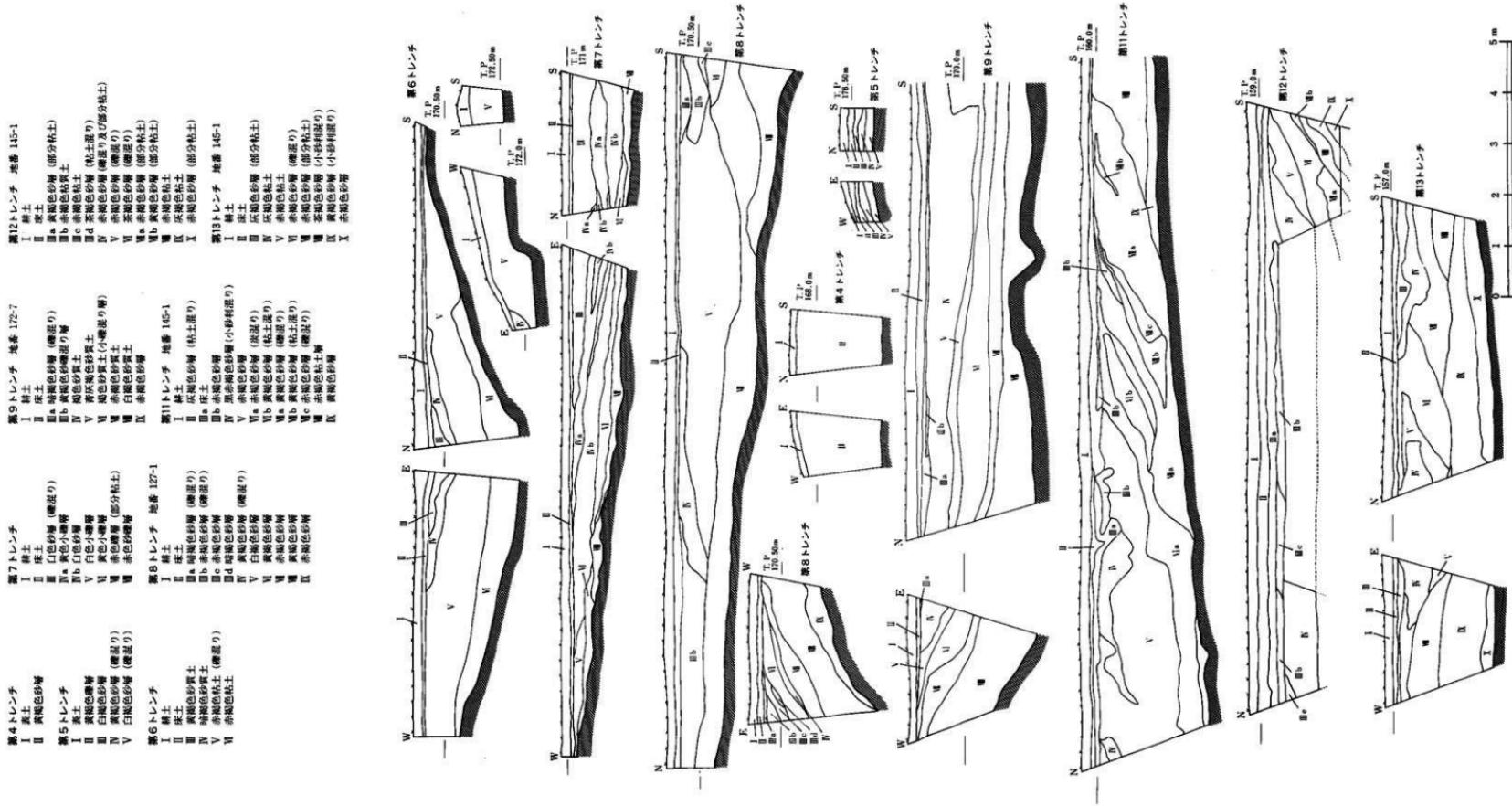
層序は第III層厚さ約30cmの黄褐色砂質土、第IV層厚さ約20~30cmの暗褐色砂質土、第V層厚さ約60~100cmの茶褐色粘土(疊混り)、第VI層厚さ約40~60cmの赤褐色粘土がそれぞれ堆積し地山となる。北断面実測図でもわかるように、西から東に、又、南から北への地山傾斜面を見い出すことができた。

第7トレンチは、第6トレンチで地山傾斜面を検出することが出来たが、同一地山傾斜面が東側にどのように続くかを確認するために第6トレンチの南東位置に幅2.8m長さ10mの東西方向にトレンチを設定した。

層序は第I層厚さ約20~50cmの白色砂層(疊混り)はトレンチ中央部から南傾斜面に堆



第8図 田原道跡第3次調査トレンチ断面実測図・I



積していた。第IV層の白色砂層内にブロック状に黄色小礫層が流れ込む状態で検出している。第V層の白色小礫層、第VI層黄色小礫層、第VII層赤色礫層(部分粘土)、第VIII層赤色砂礫層はトレンチ西側から中央部にかけてのみ堆積されて地山になる。トレンチ西端において耕土下約30cmで地上に達するが東端においては約1.3mで地山が検出された。

第8トレンチは、第6トレンチの南側に同一線上に幅3m、長さ32mのトレンチを南北方向に設定。層序は第Ⅲa層厚さ約30cmの暗褐色砂層(疊混り)、第Ⅲb層厚さ約40~50cmの黄褐色砂礫混り層、第IV層厚さ約40~60cmの褐色砂質土が次の第V層青灰褐色砂質土層内にブロック状に堆積している。第VI層は厚さ約40cmの褐色砂質土(小礫混り層)、第VII層は厚さ約40~60cmの赤褐色砂質土がトレンチ全域に検出し、一部下層で地山となる。しかし、トレンチ南側において第VIII層の白褐色砂質土が南から北への堆積が認められた。

東壁断面での最下層は第8トレンチ同様厚さ約40cmの赤褐色砂層が堆積して地山となる。地山面は北から南へのゆるやかな傾斜であり、又、西から東にかけて急傾斜で落ちていくことが断面実測図から明らかである。

第9トレンチは、第8トレンチの南側に同一線上に幅3m、長さ31mのトレンチを南北方向に設定。層序は第Ⅲa層厚さ約15cmの暗褐色砂層(疊混り)、第Ⅲb層厚さ約10cmの黄褐色砂礫混り層がブロック状に堆積している。第IV層厚さ約80~90cmの褐色砂質土、第V層厚さ約20cmの青灰色砂質土、第VI層厚さ約20~60cmの褐色砂質土(小礫混り層)、第VII層厚さ約25cmの赤褐色砂質土、第VIII層厚さ60~80cmの白褐色砂質土が堆積し地山となる。地山面は第8トレンチ同様、西から東へかけて傾斜していく。

第10トレンチは、第9トレンチ設定の南側水田地に位置し、今回の第3次発掘調査地区の最南端に幅3m、長さ34mの南北方向にトレンチを設定した。層序は第I層耕土、第II層底土、第III層厚さ約100~110cmの黄褐色砂層が堆積し地山となる。

第11トレンチは、第9トレンチ及び第10トレンチの東側の谷地形の水田地に設定したものである。トレンチの規模は幅3m、長さ23mのトレンチを南北方向に設定。層序は、第I層耕土、第II層約10cmの灰褐色砂層(粘土混り)、第IIIa層がこの水田の床上面と考えられる。第IIIb層の赤褐色砂層は底土内にブロック状に堆積しており、同一層がトレンチ南側の第VIIa層内にもブロック状に堆積している。第VII層黒赤褐色砂層(小砂利混り)、第V層はトレンチ中央部から北側に厚さ約40~150cmの赤褐色砂層、第VIa層は厚さ約20~60cmの赤褐色砂層(炭混り)、第VIb層は厚さ約40cmの黄褐色砂層がブロック状に堆積している。第VIIa層はトレンチ南側から北側にかけて底土下から約140cmにわたり堆積している。第VIIb層は黄褐色砂層(疊混り)、第VIII層は厚さ約100cmの赤褐色粘土層がトレンチ南側で底土下で検出した。第VIII層下に厚さ約20cmの黄褐色砂層が堆積し地山となる。トレンチ南側から北側にかけて

ゆるやかに傾斜している。

第12トレンチは、第11トレンチの北側に幅3m、長さ12.5mのトレンチを南北方向に設定した。層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土、第Ⅲa層は厚さ約20cmの黄褐色砂層(部分粘土)、第Ⅲb層赤褐色粘質土、第Ⅳc層赤褐色粘土、第Ⅴd層茶褐色砂層(粘土混り)がブロック状に堆積している。第Ⅳ層は厚さ約70cmの赤褐色砂層(礫混り及び部分粘土)、第Ⅴ層以下の赤褐色砂層(礫混り)、第Ⅵ層茶褐色砂層(礫混り)、第Ⅶa層赤褐色砂層(部分粘土)、第Ⅶb層黄褐色砂層(部分粘土)、第Ⅷ層赤褐色粘土、第Ⅸ層灰褐色粘土、第Ⅹ層赤褐色砂層(部分粘土)がそれぞれトレンチ南から北側に傾斜しながら堆積しており、このトレンチにおいては地山を検出することが出来ていない。

第13トレンチは、第12トレンチの北側に幅3m、長さ14.5mのトレンチを南北方向に設定した。層序は第Ⅲ層厚さ20~30cmの灰褐色砂層(部分粘土)、第Ⅳ層は厚さ約20~60cmの灰褐色粘土、第Ⅴ層は第Ⅳ層内に赤褐色粘土層がブロック状に堆積している。第Ⅵ層はトレンチ中央部において床土下から赤褐色砂層(礫混り)、第Ⅶ層は赤褐色砂層(部分粘土)、第Ⅷ層は厚さ約40cmの茶褐色砂層(小砂利混り)が第Ⅵ層と同一層位まで堆積し、第Ⅸ層は厚さ20~70cmの黄褐色砂層(小砂利混り)及び第Ⅹ層厚さ約20cmの赤褐色砂層で地山となる。

第14トレンチは、第13トレンチの北側に幅3m、長さ13mのトレンチを南北方向に設定した。層序は、第Ⅱ層床土と第Ⅳ層黄褐色砂層との間に第Ⅲa層、第Ⅲb層の黄褐色砂層(小砂利混り)が厚さ約10cmでブロック状に堆積している。第Ⅴ層は厚さ約20cmの灰褐色砂層(礫混り)、第Ⅵ層は厚さ約130cmの青褐色砂層、第Ⅶb層は黄褐色砂層(粘土、礫混り)、地山直上の第Ⅷ層は厚さ約60cmの赤褐色砂層(粘土混り)がそれぞれ堆積し地山となる。

第15トレンチは、この谷水田の中程位置に位置している。トレンチの規模は幅3m、長さ13mの南北方向のトレンチを設定した。層序は、第Ⅱ層床土、第Ⅲ層は厚さ約20cmの赤褐色砂層、第Ⅳ層は厚さ約10cmの黄褐色砂層(小砂利混り)、第Ⅴ層は約140cmの白褐色砂層(礫混り)の堆積土中に約40cmの黄褐色砂層(砂利混り)がブロック状に堆積している。最下層は厚さ約10~15cmの灰褐色砂層である。

第16トレンチは、第15トレンチより一段低い水田地に幅3m、長さ6mのトレンチを東西方向に設定。層序は、第Ⅱ層床土、下に第Ⅲa層の灰褐色砂層、第Ⅲb層の赤褐色砂層が約8cmの厚さでブロック状に堆積している。第Ⅳ層は各トレンチ全域にみられる厚さ約90~100cmの黄褐色砂層(小砂利混り)、第Ⅴ層は厚さ約60~70cmの黄褐色砂層が堆積し一部で地山となる。他の一部において第Ⅵ層厚さ約30cmの赤褐色砂層(粘土混り)が堆積し地山となる。

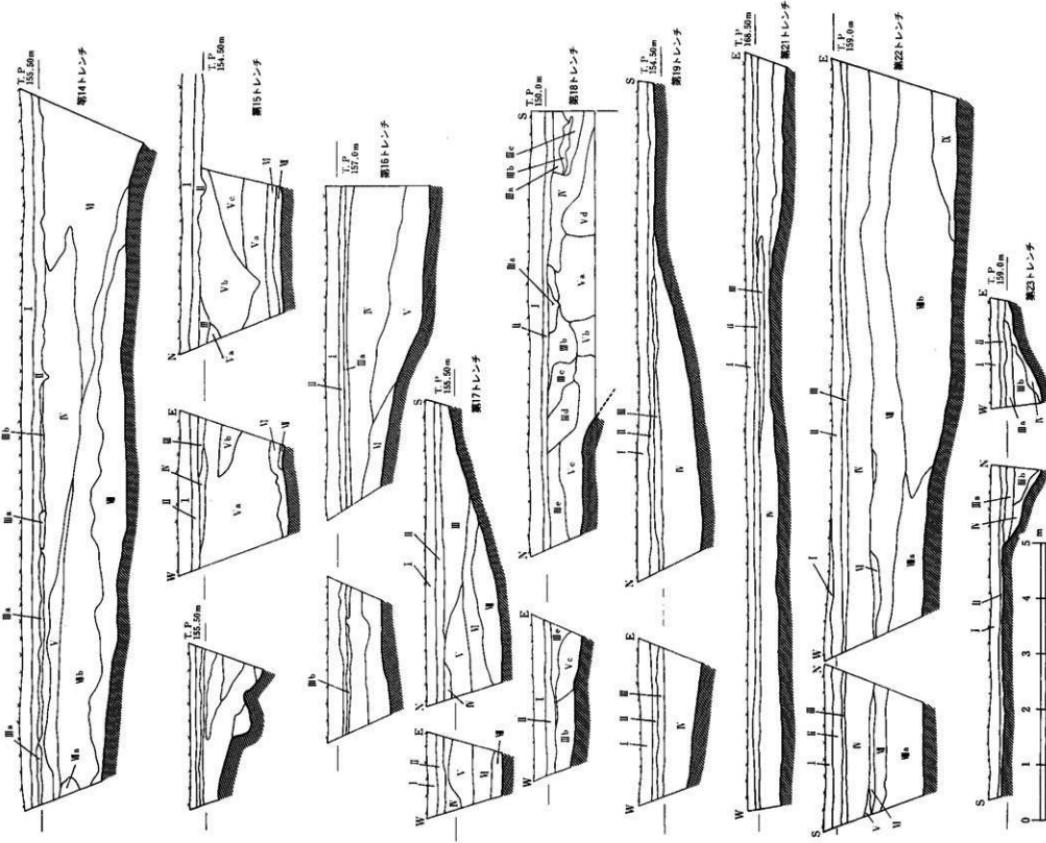
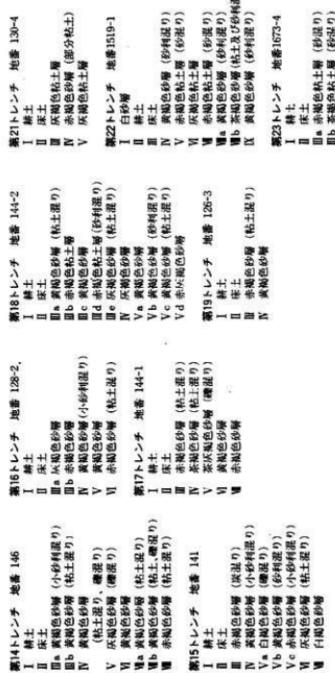


図9 田原講師第3次調査トレンチ断面測量図：II

第17トレンチは谷水田方向の南東斜面に位置する水出地に幅1.6m、長さ5.50mのトレンチを南北方向に設定した。層序は第Ⅱ層床土下に第Ⅲ層は厚さ約15~40cmの赤褐色砂層（粘土混り）で一部地山となる。北壁断面では第Ⅲ層下に約10~30cmの茶褐色砂層（粘土混り）、第Ⅴ層茶灰褐色砂層（礫混り）、第Ⅵ層黄褐色砂層、第Ⅶ層赤褐色砂層で地山となり表上下約140cmの堆積上層からなっている。

第18トレンチは調査地の最東端の最低水田地に幅3m、長さ8mの南北方向にトレンチを設定した。層序は、第Ⅱ層床土下に第Ⅲa層から第Ⅲb層までブロック状に堆積する。堆積する各層は第Ⅲa層赤褐色砂層（砂利混り）、第Ⅲb層赤褐色粘土、第Ⅲc層黄褐色砂層、第Ⅳd層赤褐色粘土（砂利混り）であり、第Ⅳ層灰褐色砂層は第Ⅲ層の下層にもぐり込み一部地山となる。又、第Ⅴ層は厚さ約10~60cmの黄褐色砂層でこの第Ⅴ層も第Ⅴaから第Ⅴc層までブロック状に堆積している。

第19トレンチは、第17トレンチの谷水田地を挟む位置にある。トレンチの規模は、幅3m、長さ9mの南北方向のトレンチを設定した。層序は東側断面でみると第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層床土で一部地山となり、トレンチ北側の方向では第Ⅲ層厚さ10cmの赤褐色砂層（粘土混り）、第Ⅳ層厚さ約50cmの黄褐色砂層で地山となる。

## V まとめ

第3次発掘調査の田原城址範囲確認調査地は、第2図の田原城址平面図に示したところの西側の深い絶壁下の標高 T.P 157.83 ~ 160.53m の棚田式谷水田地と府道中垣内南田原線の古堤街道の南に位置する旧谷水田地の標高 T.P 162.0 ~ 169.3m の棚田式谷水田地に計8ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチ内の堆積上層については第Ⅳ章においてくわしく述べたとおりである。現在まで田原城址については四條畠市史執筆者の山口博氏が貧弱な史料の中から、天保15年、上山原村差出明細帳に「古城跡、字城山、老ヶ所但し、凡式百年以前永隸之比、当地守護田原対馬守様御城跡と申伝候」とあって、田原対馬守なる田原領主が永隸在間（1560年代）、田原城に據って当地を支配していたと、くわしく研究されている。同氏の研究史は文献を中心に田原城址削平地の跡跡を構造図に示されているもので田原城址研究史上きわめて重要な構造図であった。

この田原城について第1に、いつにこの田原城が構築されたかという問題であるが、山口氏は田原城構築を15世紀後半の河内守護畠山家の内紛頃に始まるのではないかと考えられている。このように田原城は1回も発掘調査のメスを入れることがなかった。

田原城址の範囲については、本丸を中心とした北、東、南の三方については深い絶壁に廻らされた山水河流の回繞した濠を構成していたが今回の城北西側の範囲があと…歩明確にされていなかった。しかしこの範囲確認調査の結果先にも述べた棚田式谷水田地にトレンチであったが急傾斜面を呈する濠跡をそれぞれ確認することが出来、田原城構造図に追加して範囲を示すところまでできている。又第1の問題とされていた構築時期については、濠内堆積上層から出土した元豊通宝の銭と古墳時代後期の須恵器以外については、ほぼ田原城構築時期を決める資料が出土した。すなわち出土した上師質小皿及び、瓦器楕、羽釜、鋤鉢、瀬戸焼おろし皿、伊万里焼などからみて、上限年代を14世紀中葉に比定することが出来る。北宋銭の元豊通宝（1078~1085）が出土したもののこの時期に比定される土器は現在のところ出土していない。

田原遺跡第3次発掘調査地区においては、第6トレンチから第10トレンチまでの5ヶ所のトレンチから地山傾斜面が南から北へゆるやかに傾斜し、又、西から東にかけて地山は急傾斜を呈していることが明らかになった。次に第11トレンチから第15トレンチの谷水田から中世末から近世の陶磁器と砥石が出土している。この近世の土器や炭が出土していることは、近世開拓時もののか、下田原の佐水、正伝寺西側台地上、「古城」と字地されるところからこの一帯に田原領主の居館跡に関する資料かは不明であるが、この台地上に住んでいた連携等が近世に削平され谷地形地に埋めたものであろう。

次に日本住宅公團田原團地建設予定地内の文化財発掘調査で検出された遺構、遺物につ

いて簡単に説明しておきたい。これまでに検出された遺構は、縄文時代早期の落ち込み状遺構（石組）2基、中世の落ち込み状遺構、掘立柱建物跡、土壙状遺構、溝状遺構が確認され各遺構内から豊富な各種遺物が出土した。

第2次調査の際出土した中世の土壙状遺構内から出土した75枚にのぼる土師質小皿が一括して出土し、又、落ち込み状遺構は表土下約3.6mの深さで今まで擾乱されることなく15層の堆積土層が観察することができた。

戎川左岸に検出した縄文時代早期の押型文土器に伴なう落ち込み状遺構を取り囲むように検出された花崗岩の石列が検出したことは、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡だけでなく近畿地方の縄文時代早期の文化を研究する上で重要な資料である。又、縄文時代早期出土の押型文土器出土層上面から弥生時代前期の蓋が1点出土している。この弥生式土器は現存高22.3cm胴径最大径23.0cmで胴部中央に最大径を有し、胴部より頸部にかけて、3条・6条の貼り付け突帯に刻み目をもち、外面胴部にハケ目を施す畿内北部に特徴をもつ浜津の土器であり、考古第1様式（新）の時期のものである。

ここで今までの調査によって得られた成果を本概要報告書にしめくくることにしたい。

田原盆地に初めて人類が住みついた年代については、縄文時代早期の山型文、輪円文の押型文土器、貝殻条痕文、過擦文を施した土器が出土した時期の人類がこの田原の里に長期間住みつき生活したものである。この縄文式土器と同一層内から出土したサヌカイト製尖頭器・網石器・石核等の出土から人類の住みついた縄文時代早期より一時期古い旧石器時代人が住んでいた可能性も出てきている。

又、出土した弥生式土器から北河内の弥生遺跡の出現が寝屋川市太秦遺跡の弥生時代中期に始めて出現しているがこれより一時期早い前期内に天の川水系の田原において住みついている。弥生時代については、田原盆地の今後の研究課題の一つとなるだろう。

古墳時代については、国道163号線のすぐ南に派生する丘陵上に横穴式石室が分布調査において発見され、又、田原城址塗内からの出土とあわせて、この田原の派生する丘陵の突端部に数多くの古墳が今後も検出する可能性がある。

中世については始めに述べた各遺構から出土した瓦器焼成跡から落ち込み状遺構が12世紀の中頃～後期につくられ13世紀に埋められている。その他の遺構も14世紀代に作られ、掘立柱建物跡から終末期の瓦器焼成跡が出土している。最も新しい時期の遺構としては土壙状遺構があげられる。出土した土師質皿には全く瓦器焼成跡を伴出しておらず15世紀代のものである。

最後にこの田原に係るものとして「田原銭司」のことを述べておきたい。柴原永遠男氏が、古代を考える10「河内国府と国分寺址の検討」の中で「銭司の変遷と立地につい

て「河内銅錢司」にふれて—と題して報告されている。この本文中に山城銅錢司（加茂町銭司）とほぼ並存すると考えられている「田原銅錢司」が生駒市から四條畷市にかけての地域に比定されている説があり、この裏付け資料として『大日本古文書』（編年）16卷に天平宝字6年に編年した誤りを宝字4年（760）に二貫二百十四文自生馬輪東山運和炭并炭二百卅四斛一斗雁車十八両貲八十文自生馬鷹山運炭八斛車一両貢、二貨九十二文自輪東山運炭二百廿二斛一斗車十六両貢十二両別百卅一文 四両別百卅文 売二文自登美銭司村運炭十四斛車一両貢。

この中で「登美銭司村」「輪東山」があり輪東山は相楽郡和束町の地名が現存しており、「生馬鷹山」や「登美銭司村」は清滝街道と富雄川との交叉する地域に「高山」というところがある。すなわち登美銭司村がこの富雄川の下流の現在地名の登美ヶ丘町があり和炭の產地でもある。すなわちこの「田原銅錢司」もこの付近と考えられ、生駒市「北田原」「南田原」か、四條畷市「上田原」「下田原」付近と考えられている。今後この日本住宅公団田原団地建設予定地内に直接銅錢関係を示す、るっぽ、ふいご口、鉱滓、凹石、銅塊等が将来出土する可能性が出てきた。

圖

版



図版1 遺跡周辺の航空写真









図版5 田原城南濠内第2トレンチ・第3トレンチ



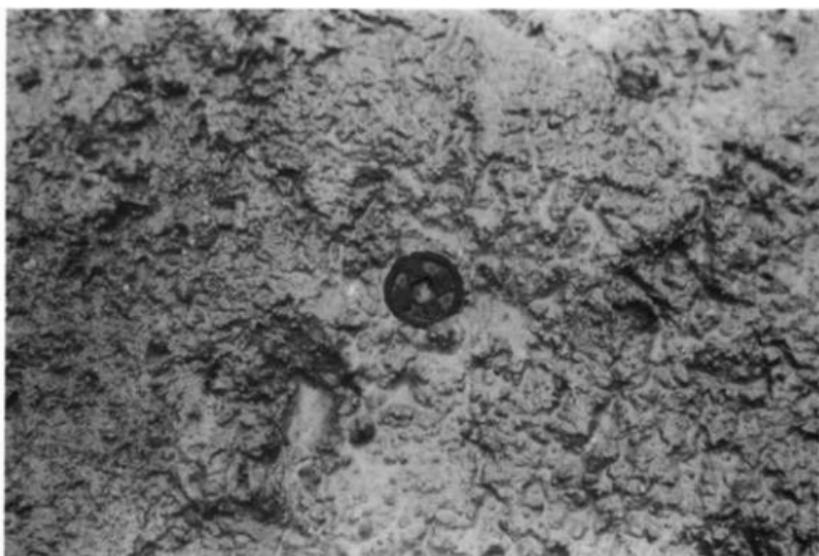
田原城南濠内第3トレンチ





田原城北濠内第4トレンチ





図版10 田原城北濠内第6トレンチ



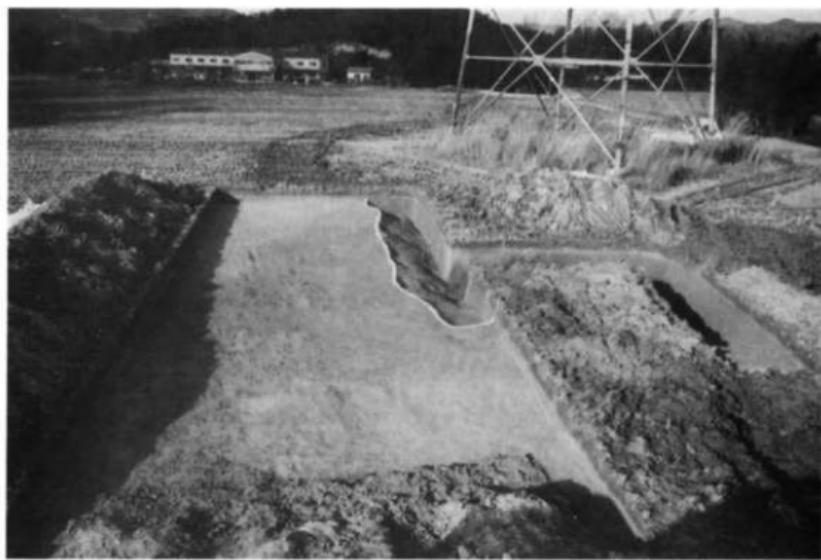
田原城北濠内第7トレンチ

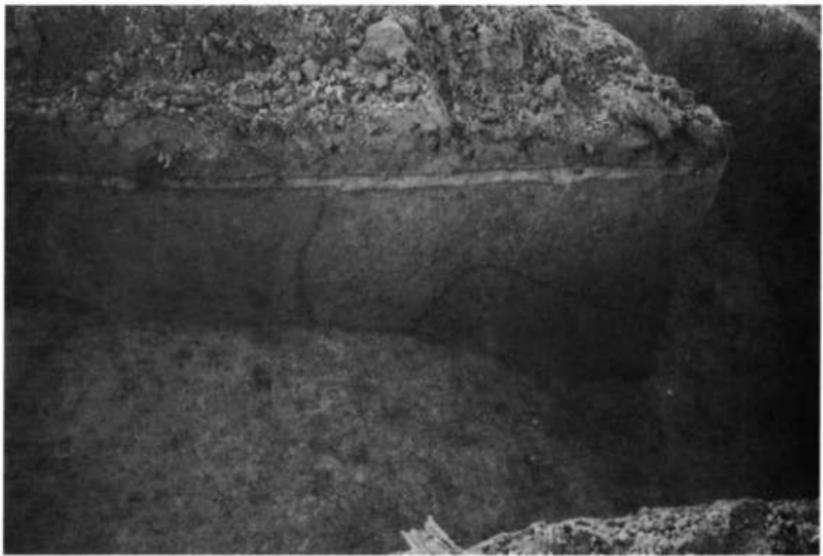


図版 12 田原城第8トレンチ



田原遺跡調査地全景・第6トレンチ全景







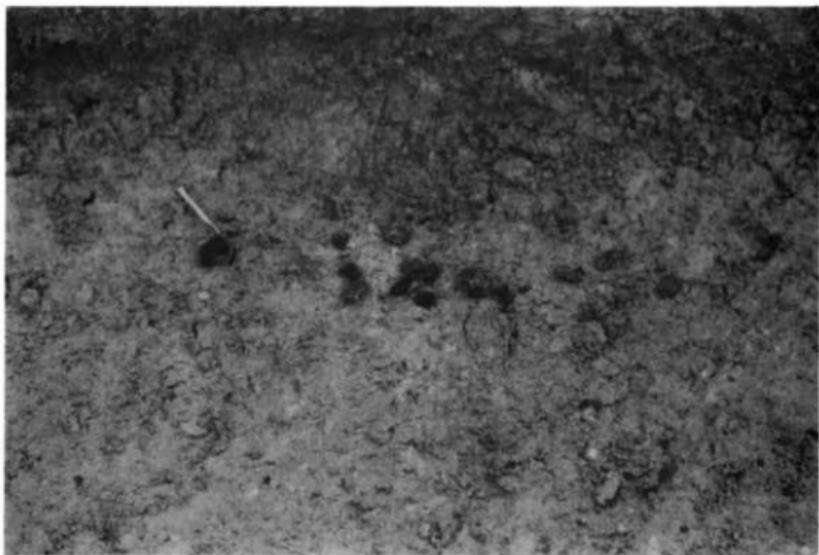
第9トレンチ全景・北壁断面

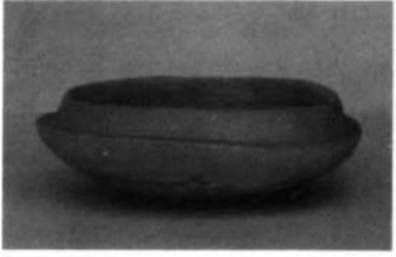
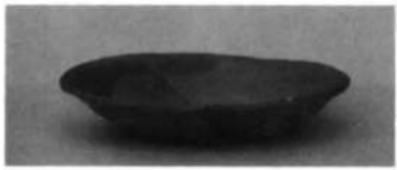
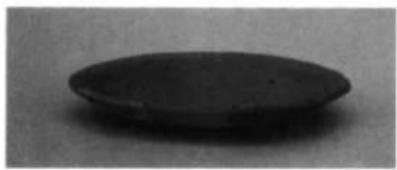
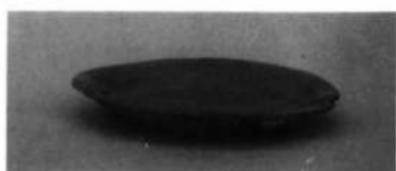


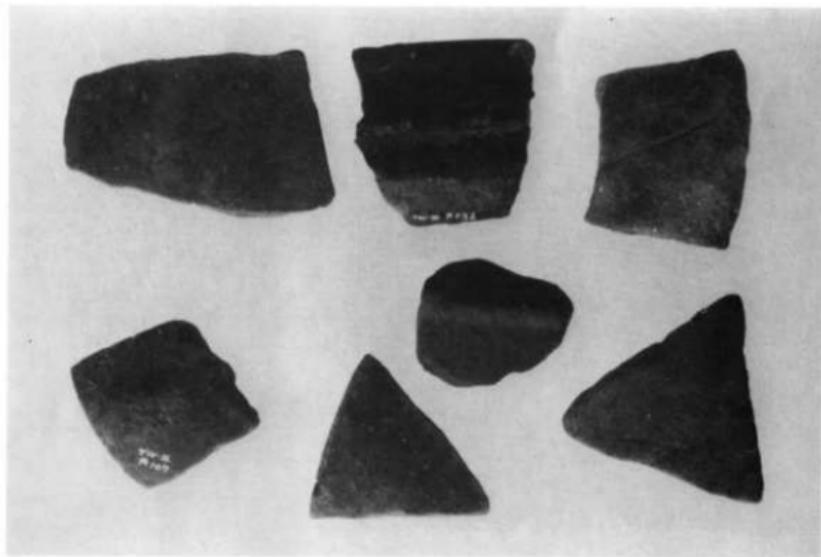


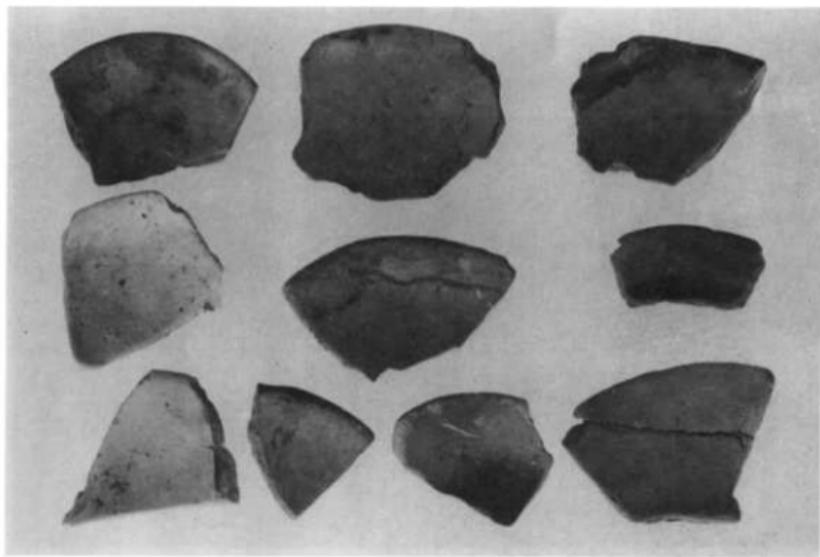
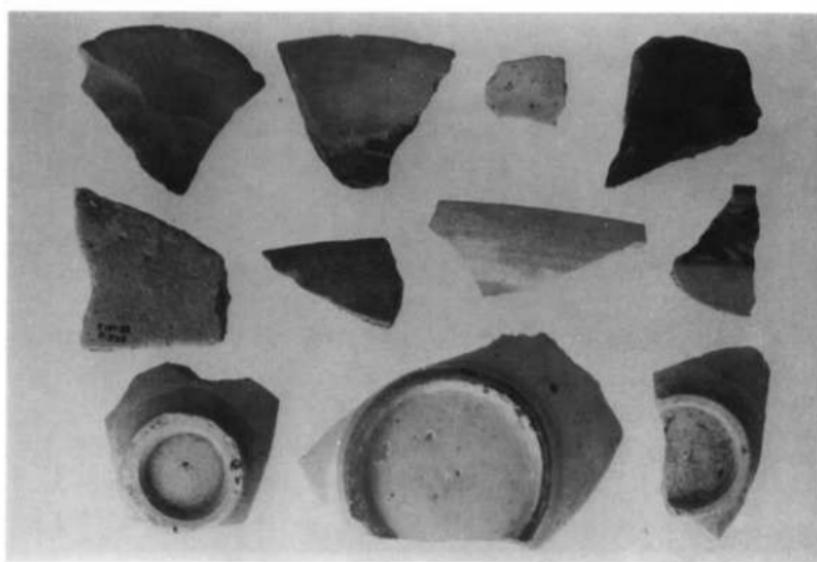


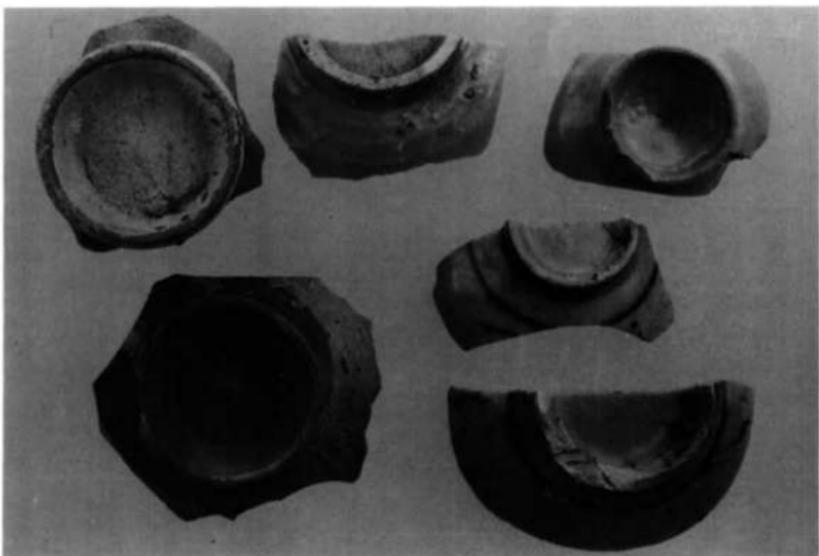
第13トレンチ南壁断面・炭化物出土状況

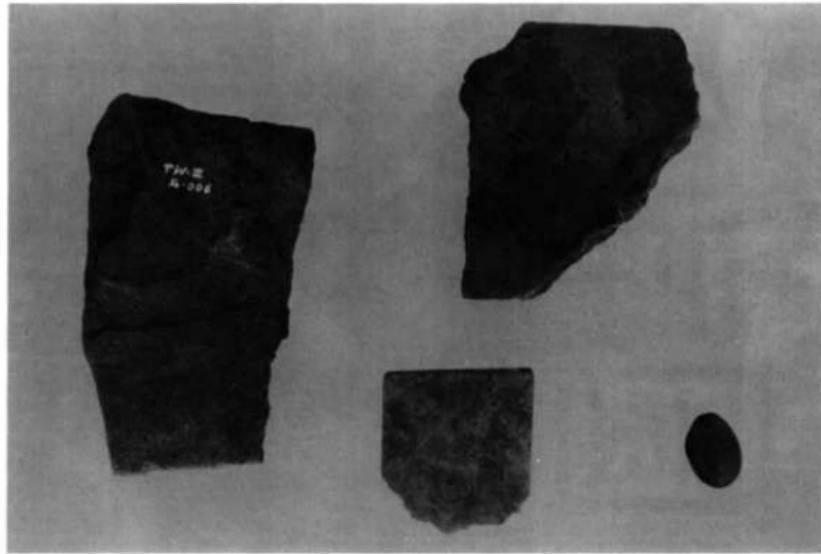
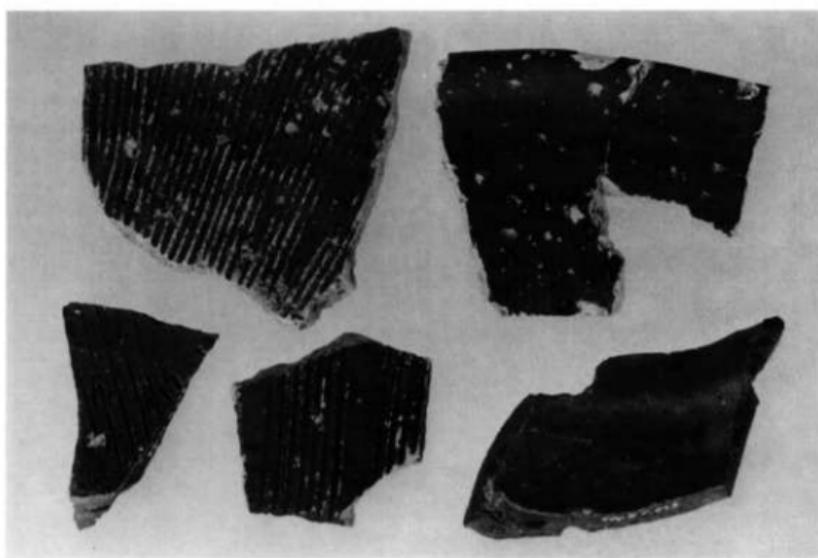


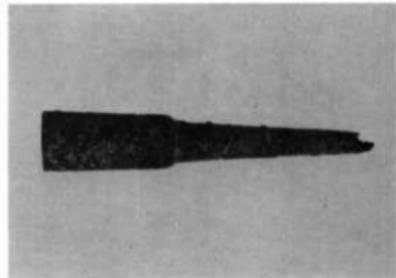
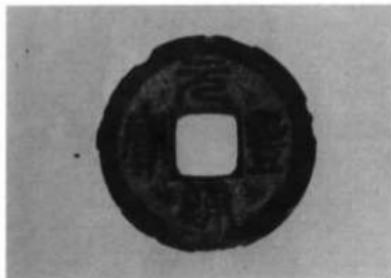
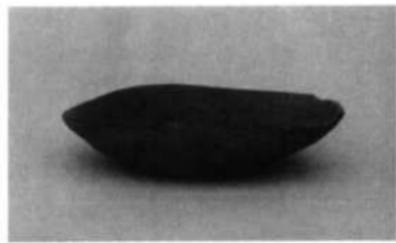
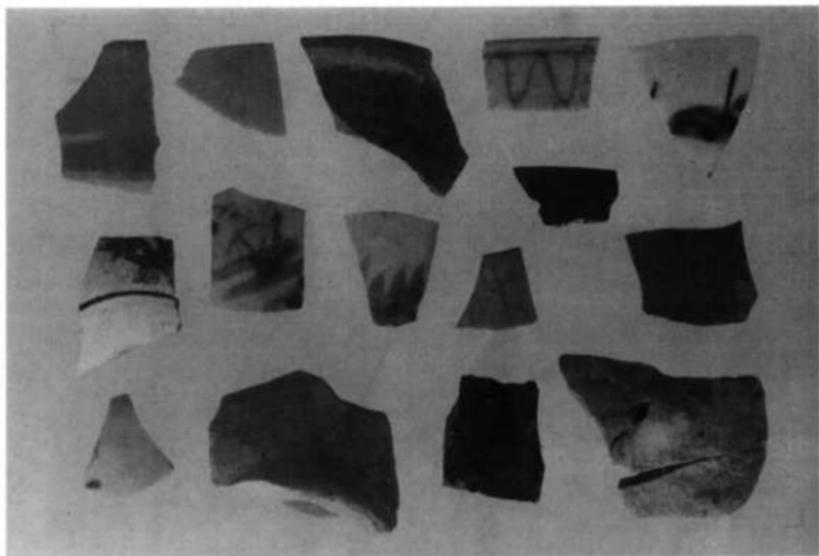


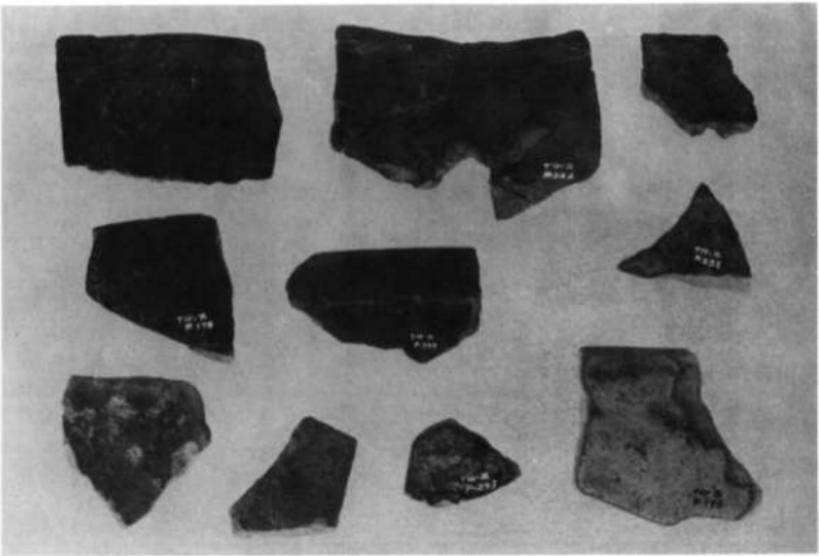
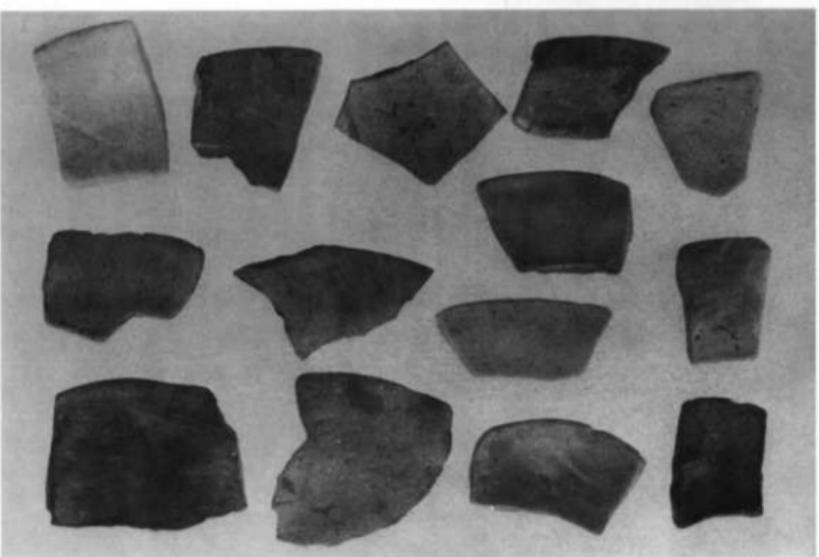












田原城址・田原遺跡発掘調査概要・II

昭和56年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社